

インド東部・オリッサにおける 貝葉写本の研究動向

DASH Shobha Rani

はじめに

著者は、オリッサの貝葉写本についてこれまでいくつかの研究を行ってきた¹。本稿では、それらの業績を踏まえた上で、大谷大学真宗総合研究所2010年度一般研究（研究課題「オリヤー文字サンسكريット貝葉写本調査」研究代表者：山本和彦）の調査結果を加味し、インド東部オリッサ州の貝葉写本の重要性、現状および今後の課題を中心に述べる。

インド東部・オリッサ州に数多く残されている貝葉写本が近年注目を集めている（図1）。オリッサは現在でも貝葉写本の伝統が生きている地域である。その起源を正確に知ることは困難であるが、6世紀頃にすでにその伝統が成立していたことが様々な碑銘から判明している²。7世紀の Śailodbhava 王朝期の碑文にも当時貝葉が用いられていたことが記されている。そして7世紀に建立された Mukteśvara 寺院も、貝葉写本の歴史を伝えている。その時から現在ま

*脚注を削除

詳細は、大谷大学真宗総合研究所研究紀要 31号「扉、目次、Contents、奥付、訂正とおわび」参照

- 1 (i) DASH Shobha Rani 「日本で発見されたオリヤー語の『マハーバーラタ』について」『印度學佛教學研究』第54巻第2号、日本印度学仏教学会、2006年、41頁～244頁。
- (ii) DASH Shobha Rani 「インド・オリッサ州の貝葉写本の特徴について」『仏教學セミナー』第85号、大谷大学仏教学会、2007年、13頁～23頁。
- (iii) DASH Shobha Rani, “Palm Leaf Manuscript of Mahābhārata in Oriya Discovered in Japan”, 『インド考古研究』第28号、インド考古研究会、2007年、103頁～111頁。（英文）



図1 インドにおけるオリッサ州の位置

で、歴史の様々な浮沈を通して貝葉写本の伝統は継続している。象牙、竹の葉、紙など様々な素材の写本があるが、その中でも貝葉写本の伝統は古くから続き、その内容や量も豊かであるため、本論文においてはオリッサの貝葉写本文献を中心として、その現状と今後の課題について述べたい。

現 状

オリッサに存在する貝葉写本文献の言語は主にサンスクリット語とオリヤー語である。しかし、それらは言語を問わずカラニー (karaṇī) 書体で書かれている。サンスクリット語の写本の場合は、言語がサンスクリット語であっても文字はカラニー書体となっている。15世紀頃までの、オリッサの文学作品と言

2 (i) Rath, J., "Palm-Leaf Manuscripts: The Proud Possessions of Orissa", *Orissa Review*, November, 2005, pp. 37-38.

(ii) Pani, S., *Illustrated Palmleaf Manuscripts of Orissa*, Orissa State Museum, Bhubaneswar, 1984, p. 1.

えば、サンスクリット語で書かれたもののみを指す。15世紀の有名な詩人シュードラムニ・サーララーダーサ (Śūdrāmuni Sāraḷādāsa) がオリヤー語に翻案された『マハーバーラタ』を書き、オリッサにおけるオリヤー語文学の伝統を創始したと言われている。それは、『サーララー・マハーバーラタ』(Sāraḷā Mahābhārata) として有名であり、他の地方言語でも翻案されるための手本となった。

オリッサには「『アマラ』³ [コーシャ] とジュマラ [文法]⁴ は正しく暗記し、それ以外は屋根の上に置け⁵」ということわざがあるほど、オリッサにはサンスクリット語の教育に力を注いできた伝統がある。ゆえに、この地域に数多くのサンスクリット語作品が存在するのは当然である。

1981年に Sri Jagannatha Sanskrita Vishvavidyalaya (シュリー・ジャガンナータ・サンスクリット大学) というインドでは第三番目のサンスクリット大学がオリッサのプリーに創立され、サンスクリット語文献の様々な分野の教育・研究に専念している。この大学の図書館に3,000本の貝葉写本が収蔵されている。保管状況も良く、その中の殆どが博士論文などの研究材料として使われ、出版もされている。

オリッサにおける貝葉写本の最大のコレクションはオリッサ州立博物館に見られる (図2)。現在、オリッサ州立博物館に37,000本余りの写本が保管され、インド最大の数を占めると言われている。これらの写本は下記の25の広範囲に及ぶ項目によって分類されている。

1. ヴェーダ、2. タントラ、3. 占星学／天文学、4. 法典、5. アーユルヴェーダ、
 6. 数学、7. 芸術学、8. 音楽、9. 辞典、10. 文法、11. 梵文プラーナ、12. 梵文詩、13. 修辞、14. ベンガル文字の梵文作品、15. ベンガル語の作品、16. デーヴァナーガリー文字の作品、17. オリヤー語のプラーナ、18. オリヤー語の詩、
 19. オリヤー語の散文、20. オリヤー語の歴史的文学、21. アラビア語の写本、
 22. 哲学、23. テルグ語の写本、24. 複写写本、25. 図解・挿絵入りの写本。⁶
- これら以外にも、数多くの貝葉写本がオリッサの大学図書館、民間図書館や

3 The *Amarakoṣa*. 6世紀ごろ成立したサンスクリット語辞典。

4 The *Jumara-vyākaraṇa*. サンスクリット語文法の伝統の一つ。

5 「amara jumara niṭhei ghoṣa, āu sabu kathā cāḷare khosa」——オリッサのことわざ。

6 Patel, 2004, p. 61.



図2 オリッサ州立博物館



図3 Sambalpur 大学所蔵貝葉写本



図4 西オリッサの Bhatli 村のバラモンの家に所蔵する貝葉写本



図4-1 西オリッサの Bhatli 村 Dadhibamana 寺院の僧の家に所蔵する貝葉写本



図5 NMMの入り口

個人蔵として至る所に散在している。その中で、西オリッサを代表する Sambalpur 大学博物館 (1,169本)⁷ (図3)、州都ブバネシュワルにある研究所 Kedar-natha Gaveshana Pratisthan (242本)⁸、National Archives の東支所 (96本) や Utkal 大学所蔵の写本がカタログ化され、その保存状態も良い。

オリッサの習慣の一つとしてヒンドゥー教徒、特にバラモンカーストの家庭ではいまだに貝葉写本そのものが供養の対象となっているため、「Brāhmaṇa śāsana」と言われるバラモンカーストの人々が多く住んでいる村では、一戸あたり平均20～25束程度の貝葉写本を所有しているということを、現地調査の際に知ることができた (図4、図4-1)。

また、インド中央政府の文化省の National Mission for Manuscripts (以下 NMM と略する) という大規模なプロジェクトが2003年2月に開始された (図5)。NMM は写本と関係する様々な活動、例えば、写本のデジタル化、出版、保存修復、カタログ作成などに専念しているが、その一環として巨大なデータ

7 Mishra, P. K., 1985を参照。

8 Panda, 1998を参照。

ベースが構築されている。このデータベースには、インド各地に散在する写本の情報が収録されている。そのうち、大部分が、オリッサの貝葉写本によって占められている。詳しくは <http://www.namami.org/> で見ることができる。数年前担当の職員に2007年にデータベースを公開し、ウェブ上で検索が可能になると言われていたが、残念ながらいまだ十分に活用できる状態にはなっていない。⁹

Orissa Research Project (ORP)

ORP は German Research Council の援助のもと、ハイデルベルグ大学南アジア研究所 (South Asia Institute) によって1970～1975年の間実行された。このプロジェクトの一環としてオリッサの様々なところから数々の貝葉写本が収集され、その一部に対する二巻の descriptive カタログが“Orissan Manuscripts”という題名で G. C. Tripathy 教授により編纂されているがまだ未発行の状態である。このカタログに収録されている196本の貝葉写本および199本の転写された写本は現在、ブバネシュワルにある National Archives の東支所に保管されている。他に、西ベンガル州から収集された141本のオリヤー語およびサンスクリット語で書かれた貝葉写本もここで収蔵されている。

トヨタ財団の助成金によるプロジェクト

現在東海大学専任講師である杉本浄氏は、2005～2007年までトヨタ財団から助成金を受け、オリッサの貝葉写本の研究を進めている。2005年度と2006年度にわたってオリッサ州丘陵地域における貝葉写本のカatalog作成を中心とする保存・収集事業を行った。①中世ヒンドゥー王朝の系統を引き継ぐ旧ケオンジャル藩王国の王家と密接な関係にあった宮廷司祭の家に所蔵されている、18世紀から19世紀の貝葉写本の目録を作成し、②今後の保存・収集事業の活性化と地方史研究者の組織作りを試みることを目標とされた。

この2年間の成果をまとめるために、続く2007年度ではケオンジャル貝葉写本を中心とするCatalog出版を目標とし、内容・項目の精緻化を試みた。それ

9 なお、現時点では1,810,000本の写本の電子データが収集されていることがウェブ上で公開されている。



図6 SARASVATI 研究所の入り口



図6-1 SARASVATI 研究所所蔵の貝葉写本



図 6-2 大谷大学真宗総合研究所の協力による貝葉写本保存作業-1



図 6-3 大谷大学真宗総合研究所の協力による貝葉写本保存作業-2

と同時に今後に繋がるプロジェクトのあり方、現地に成果を還元していく方法、さらに地方史・郷土史構築の道筋をより明確にすることが課題とされた。現在、カタログの版下原稿は完成し、印刷をすれば完全完成する最終段階にある。

「資金面、規模、人的なネットワークなどで困難を極めた事業ではあったが、3年間の助成で経験したことを今後とも生かしていきたい。将来的には、日本だけでなくオリッサ州の各地において、貝葉写本の展示会を開き、保存・収集事業の重要性を訴えながら、地道に事業を継続させていきたい」と杉本氏が述べて、希望を捨てずにたとえ地道な作業でも、これから未整理の貝葉写本を世界の研究者に提供できるよう努力に勤める方針である。

SARASVATI 研究所と大谷大学の共同プロジェクト

オリッサの Bhadrak 地区にある SARASVATI 研究所 (Sanskrit Academy of Research for Advanced Society through Vedic and Allied Tradition of India) には、約5000本の貝葉写本が未整理のまま保管されている(図6、図6-1)。2007年9月より大谷大学の協力の下で、同研究所と真宗総合研究所西藏文献研究班との共同プロジェクトが立ち上がり、同研究所所蔵の貝葉写本の整理、カタログ化と保全作業が今後の課題である(図6-2、図6-3)。

2009年3月の調査により、同研究所に収蔵されている文献は、叙事詩、プレーナ、法典 (Dharma śāstra)、詩 (Kāvya)、タントラ、天文学、政治学、ウパニシャッド、祭祀に関する文献 (karmakāṇḍa) など多岐にわたることが判明した。その中で重要なものとして、サンスクリット語辞典 *Amarakośa* の注釈書、菩提樹の供養方法が記された *Aśvattha Pūjā*、密教図像学関係の *Baṭuka Bhairava*¹⁰、ヒンドゥー教の祭祀について述べる *Prāyaścita Manohara* や *Prāyaścita Karaṇa*、天文学関係の *Jātaka Ratnāḥī*、*Jātaka Aḷaṅkāra*、政治学関係の *Cāṅkyaśāra Saṅgraha* などを見出すことができた。

そのうち、最も注目すべきは、*Amarakośa* の注釈書である(図7)。専門家たちによれば、karaṇī 書体・オリヤー語のノート付の写本の存在は珍しく、その研究価値があるようである。それゆえ、*Amarakośa* のこの写本の校定及び和訳

10 オリヤー語には「va」の文字や音はないため、それに当たる全ての文字は「ba」と表記される。

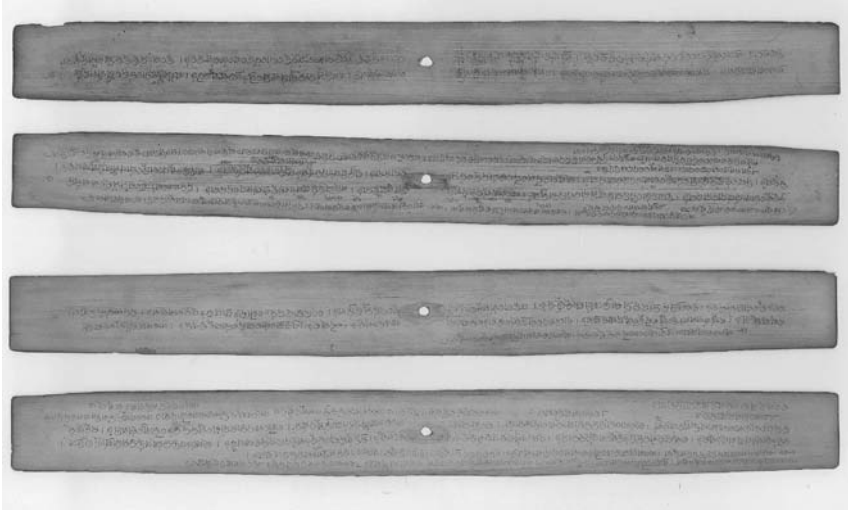


図7 SARASVATI 研究所所蔵 *Amaraḥoṣa* の貝葉写本

の作業を今後慎重に続けていく予定である。

SARASVATI 研究所に元々収集されていた5,084本の写本のうち、現在、約3,000本はひどいダメージを受けているため、研究することができない。2007年に初めて研究所を訪問した時に見た状態よりも、更に悪化していた。その理由は、海岸地方特有の潮風と湿気、ネズミ、白蟻等の害虫によるものに加え、適切な保管場所を準備することができなかったことにある。我々のプロジェクトから少なくとも保管用の助成金や必要な物、例えば、本棚、写本を包むための赤い布、防虫剤などの整備品と、保存のための労働費などを大がかりに提供することができれば、少しは劣化を免れたであろうと考えると残念でならない。

オリッサ州立博物館所蔵のサンスクリット語写本のみのアルファベット順のカタログが1973年に出版され、3,200本の写本が収録されている¹¹。さらに、サンスクリット語貝葉写本の分野別の descriptive カタログもいくつか出版されている。しかし、これらは1960年代に編纂されたものであり、収録されている写本のうち数本はダメージを受け研究対象外となっている。また、同州立博物館では新たに数多くの貝葉写本を収集しているが、それらはこの目録に載せられ

11 Mishra, Nilamani (ed.), *An Alphabetical Catalogue of Sanskrit Manuscripts*, Orissa State Museum, Bhubaneswar, 1973を参照。

ていないため、実質上この目録だけでは州立博物館所蔵の貝葉写本の全容を確認することはできない。手書きの簡易カタログがあるものの、それは現代オリヤー文字で書かれているため、インドの他の地方の出身者や外国の研究者が使用することは殆ど不可能である。

現在入手可能なカタログを見れば śruti, smṛti, purāṇa, vedānta, nyāya などインド哲学、叙事詩、タントラ、医学、文法、占星術などの幅広い分野にわたる貝葉写本がオリッサの各所に散在していることがわかる。オリッサのサンスクリット語写本の中で *Atharva Veda* の Paippalāda saṁhitā は、研究者たちの中で夙に知られている。12世紀オリッサの詩人 Jayadeva の *Gītagovinda* はヴィシュヌ神の10体の化身 (daśāvatāra) について、詩で語ったサンスクリット語の作品として有名であり、インド古典舞踊において欠かせない素材ともなっている。当然のことながら、*Gītagovinda* の数多くの写本が今も残っている。さらに、この文献は、一般的に知られている長方形の写本ではなく、魚の形や、数珠の形で作られ、内容だけではなく芸術的にも注目を浴びている。象牙に彫られた *Gītagovinda* は国宝にもなっている。これは、UNESCO の世界遺産としてノミネートされた作品の一つでもある (図8)。

「津島貝葉」の研究

既述の15世紀半ばに活躍した有名な詩人サーララーダーサによって書かれた221葉(両面記載)からなるオリヤー語の『マハーバーラタ』 (*Saralā Mahābhārata*) の貝葉写本が日本の愛媛県津島町に存在する。同貝葉写本は江戸時代中期(18世紀)ごろに伝来したものである。現在、それは「津島貝葉」と名づけられ、宇和島市教育委員会津島支所教育課が市指定文化財として管理している。中世オリヤー文字(カラニー書体)を使用した中世オリヤー語で記されており、その書写年代は17世紀初頭と考えられる。内容は叙事詩『マハーバーラタ』の「森林章」の第1部に相当するものである(図9)。

12 (i) Mahapatra, Kedarnath (ed.), *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts of Orissa*, Vol. III (Purāṇa Manuscripts), Orissa State Museum, Bhubaneswar, 1962.

(ii) Dash, M. P. (ed.), *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts of Orissa*, Vol. V (Tantra Manuscripts), Orissa State Museum, Bhubaneswar, 1965.



図8 象牙に彫られたサンスクリット語の写本 *Gītagovinda*



図9 日本で発見されたオリエント語『マハーバーラタ』の貝葉写本「津島貝葉」

日本における『マハーバーラタ』の研究は、その殆どがサンスクリット語テキストに基づいているものである。インドには、『マハーバーラタ』がサンスクリット語だけでなく、様々な地方言語でも書かれている。これらの全てはサンスクリット語で書かれた『マハーバーラタ』からの翻訳ではなく、それぞれの地方で発展し、地方独自の色に染められた文献である。「津島貝葉」もサンスクリット語『マハーバーラタ』の翻訳ではなく、オリッサ地方独自の『マハーバーラタ』になっており、また、同地方は独自の貝葉写本文化を有している。

津島町は愛媛県の南に位置する町であったが、2005年8月1日に近隣の三間町と共に宇和島市に合併された。残念なことに市町村の合併にともなう管轄部門の諸事情により、「津島貝葉」の研究は殆どなされていなく、その存在も全く知られていない。

管見の及ぶ限り「津島貝葉」は、日本で発見された唯一のオリヤー文字で記されたオリヤー語の貝葉写本である。筆者は2008年度～2010年度まで科学研究費補助金を受け、「日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』の研究」（基盤研究C、課題番号20520048）という研究課題で、「津島貝葉」のデジタル画像化及び校訂ノート付きのローマ字転写テキストの作成を行なった。さらに、2011年度～2014年度までの科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）を受け、「日本で発見されたオリヤー語『マハーバーラタ』『津島貝葉』の校訂テキスト作成」（基盤研究C、課題番号23520072）という研究課題で今までの研究を継続することになっている。今回の研究は、「津島貝葉」の5つの異本を様々な所蔵機関から入手し、「津島貝葉」を底本としたオリヤー語版『マハーバーラタ』の「森林章・第一部」の校訂テキスト作成を目的とする。

今後の課題

以上のような未整理のままの貝葉写本をインドだけでなく海外の研究者にも研究資料として提供し研究を進めるためには、次のような順番で作業を行なう必要がある。

1. 貝葉写本に対する作業、例えば、カタログ化、デジタル化、解読などを進めるには相当の時間が必要である。オリッサの梵文写本の素材は木の葉であるため、ダメージを受けやすく、壊れやすいものである。その寿命も約300年と言われている。それゆえ、上記の作業を進める前にまず、相応しい

環境の中での貝葉写本の保管・保存が必要である。最低限の保存環境を整えることにより、研究が永続し、また幅広い研究が可能になる。

2. 未整理のものが多く、また早期に広くその全容を知らせるために、まず簡易カタログをローマ字表記／英語で作成する。
3. その情報を、インターネットを利用して研究者に提供する。
4. 現在のところ一部のものに対してしか descriptive カタログが作成されていない。簡易カタログだけでは、例えば、タイトルのみを記載した簡易カタログではその文献の内容を理解することは困難であるため、写本のより詳細な情報を公開するために簡易カタログ作成後速やかに descriptive カタログ作製に移行する必要がある。
5. 先も述べたように、オリッサの梵文写本は難読な *karaṇī* 書体で書かれている。これを読める人はオリッサにも非常に少ないため、そのローマ字転写つまり diplomatic edition を作成する。
6. そして、研究者たちに簡単に提供することができ、効率よく研究を進めるために、貝葉写本一枚一枚をデジタル化する必要がある。そのために大規模な予算が必要とされるので、写本の重要性和破損の度合いに基づき、撮影の優先順位を決めデジタル化作業を進める。

おわりに

研究者たちはよく、自分の関心のある写本のみを取り上げて、その他の写本の存在を無視してしまいがちである。しかし、長い歴史の中で生き残っているサンスクリット語写本はそれ全体がインドやオリッサだけでなく、人類そのものの遺産とも言えるので、写本全体の大切さを認識し、次の世代まで残す努力をまずしなければならぬと思う。多くの研究者はヴェーダ、叙事詩、プレーナや哲学などの写本の研究に興味を持ち、その研究を行なうが、それ以外の分野の写本もある時代や地域の人々の歴史、考え方や生活について情報を与えてくれるので、今後そのような写本の重要性をも考慮に入れて研究を進めることを期待してやまない。

もしこのまま写本全体に目を向けずに単一の写本だけに目を向け続けるならば、残された写本が散逸してしまう可能性が非常に高い。そうになると、今我々が中央アジアの写本の断片を発見してある種の「ロマン」を味わって喜んでい

るのと同様の、はかないロマンを後世の人々に味わわせることになるであろう。

また、写本の調査などを行なう時に、最も注意を払わなければならないのは、これらの貝葉写本は単なる文献としての存在だけではなく、ある地域の人々の信仰の対象でもあるので、我々の研究の過程で彼らの信仰心に傷を付けないように配慮することである。

アショーカ王の時代からオリッサ州とスリランカや東南アジア諸国は宗教や貿易を通して結ばれていたことは周知の通りである。それらの国々に貝葉写本がかつて紙の代用物として扱われていたことは明白である。そのような状況の中、大谷大学真宗総合研究所一般研究の課題の一端として、筆者は2010年8月にスリランカでの貝葉写本の調査も行った¹³。その際に国立博物館や国立図書館・資料館で行われている貝葉写本保存修復についても調べた。これらの機関の保存修復に関する専門家たちは、オリッサへ渡り Indian National Trust for Art and Cultural Heritage¹⁴の指導のもと一定の研修期間を終え、その知識をスリランカの貝葉写本保存・修復に活用しているという情報を得た。

このことから、オリッサの貝葉写本の研究及び貝葉写本研究におけるオリッサの役割を今後さらに検証していくことが必要と思われる。

参考文献

- 1 Mishra, P. K. (ed.), *Descriptive Catalogue of Palm Leaf Manuscripts*, University Museum, Sambalpur University, 1985.
- 2 Panda, Bhagabana (ed.), *Descriptive Catalogue of Manuscripts*, Kedarnatha Gaveshana Pratisthana, Bhubaneswar, 1998.
- 3 Mishra, Nilamani (ed.), *An Alphabetical Catalogue of Sanskrit Manuscripts*, Orissa State Museum, Bhubaneswar, 1973.
- 4 Patel, C. B., "Palmleaf Manuscript Legacy of Orissa and National Mission for Manuscripts", *Orissa Review*, October, 2004.
- 5 Mahapatra, Kedarnath (ed.), *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts of Orissa*, Vol. III (Purāṇa Manuscripts), Orissa State Museum, Bhubaneswar, 1962.

13 詳細については、ダシュ ショバ ラニ「スリランカにおける貝葉写本研究の現状」『大谷大学真宗総合研究所・研究所報』57号、2010年、18頁～19頁を参照。

14 貝葉写本を含む美術品保存修復に関する全国的な組織で、INTACHの名前でよく知られている。

- 6 Dash, M. P. (ed.), *A Descriptive Catalogue of Sanskrit Manuscripts of Orissa*, Vol. V (Tantra Manuscripts), Orissa State Museum, Bhubaneswar, 1965.

付記

図9の写真は宇和島市教育委員会津島支所教育課より提供していただいた。それ以外の写真については筆者が撮影したものである。